

徳島市 庄・蔵本遺跡

—埋蔵文化財発掘調査実績報告書 98年度—

徳島大学ゲノム機能研究センター建設予定地

徳島大学埋蔵文化財調査委員会

徳島大学埋蔵文化財調査室

目次

- 1 調査地の名称
- 2 調査地
- 3 調査期間
- 4 調査面積
- 5 調査体制
- 6 遺跡の概要と調査経過
- 7 調査区の立地環境と基本層序
- 8 調査の成果
 - ①第1遺構面 ②第2遺構面上層 ③第2遺構面 ④第3遺構面
- 9 まとめ

- 第1図 庄・蔵本遺跡の位置
- 第2図 今回の調査区と弥生時代地形
- 第3図 近世（第1遺構面）・古代～中世（第2遺構面上層）の主な遺構
- 第4図 6世紀後半～8世紀の主な遺構
- 第5図 古墳時代前中期の主な遺構
- 第6図 弥生時代後期後半の主な遺構
- 第7図 弥生時代中期末～後期前半の主な遺構
- 第8図 弥生時代前期～中期前半の主な遺構

- 図版1 近世水路・耕作痕跡等（第1遺構面）：古代～中世溝など（第2遺構面上層）
：7～8世紀の掘立柱建物
- 図版2 古墳時代の溝内土器出土状況（第2遺構面）：古墳時代の溝・ミニチュア土器
出土状況（第2遺構面）
- 図版3 弥生時代後期後半の溝・土器出土状況（第2遺構面）：弥生時代後期後半の溝
内土器・鉄斧出土状況細部（第2遺構面）
- 図版4 弥生時代後期後半の集落（第2遺構面）：弥生時代後期後半の竪穴住居：弥生
時代中期末～後期前半の方形周溝墓（第2遺構面）
- 図版5 弥生時代中期前半の溝（第3遺構面）：弥生時代前期の河道と堰（第3遺構面）

1 調査地の名称

庄・蔵本遺跡 徳島大学ゲノム機能研究センター地点

2 調査地

徳島市蔵本町3丁目18-15番地 (徳島大学蔵本団地内)

3 調査期間

平成10年9月1日～平成11年2月2日

4 調査面積

約1000m²

5 調査体制

調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査委員会

委員長 齋藤史郎 (徳島大学長)

調査担当 徳島大学埋蔵文化財調査室

室長 北條芳隆 (総合科学部助教授)

調査員 橋本達也 (総合科学部助手)・中村豊 (大学開放実践センター助手)

・北條芳隆 (総合科学部助教授)

調査補助員 山本愛子・岸本多美子・原多賀子・安山かおり (施設部技術補佐員)

6 遺跡概要と調査経過 (第1図)

庄・蔵本遺跡は徳島市蔵本町から庄町にかけて広がる遺跡である。この遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世という旧石器時代を除く日本史上のほぼすべての時代の遺跡が確認されている複合遺跡である。遺跡内容の豊富さでは徳島県内においてもっとも代表的な遺跡と言っても過言ではない。

本遺跡およびその周辺では徳島県教育委員会 (以下、県教委と略す)、徳島市教育委員会 (以下、市教委)、徳島大学埋蔵文化財調査室等 (以下、徳大埋文調査室) によってすでに多くの発掘調査が行われ上記各時代の多くの遺構・遺物を確認している。ただし、庄・蔵本遺跡という名称は徳島大学蔵本団地内の遺跡について徳島大学が用いている名称である。県教委・市教委ともに遺跡としては「庄遺跡」の名称を用いている。これは両教委ともに調査地の多くが庄町の地域で行われた経緯に基づいている。しかし、徳島大学構内はその大部分が蔵本町に属し、しかもこの蔵本町域において豊富な遺跡内容が確認されていることから「庄・蔵本遺跡」との名称を用いている。なお徳島大学蔵本団地内においては今回の調査で本格的な調査だけでも第16次目の調査となる。

今回の調査地、ゲノム機能研究センター建設予定地は徳島大学動物実験施設、青藍会館、医療技術短期大学部、分子酵素学研究センターというこれまでに県教委、徳大埋文調査室等によって発掘調査が実施されている地区に周囲を囲まれている。また同様に発掘調査が行われた体育館、器具庫、活動共用施設にも近接している。これらの調査区ではいずれも弥生時代を中心とし古墳時代や古代・中世に至る各時代の遺構・遺物を豊富に出土してお

り、この一帯がきわめて遺構密度の高い地域であることが判明している。また、これまでの発掘調査ではとくに弥生時代前期の成果が著しく、西日本という範囲で見ても代表的な遺跡であることが判明している。これらの状況から今回の調査地区においても、調査以前より相当量の遺構・遺物が内包されているであろうことは確実視されていた。

今回の発掘調査は平成10年9月1日から実施し、①近世、②古代後半～中世、③弥生時代後期～古墳時代～古代前半、④弥生前期～中期の順に層位ごとにわけて調査した。調査期間中の9月後半～10月にかけては相次ぐ台風の到来と集中豪雨のため作業が著しく滞り、当初予定した平成10年12月末までの調査期間の延期が避けられない状態となった。また、調査経過の中でこれまでの調査区にもまして遺構の密度がきわめて高く、豊富な内容を誇る事が判明し、さらに調査期間の若干の延長が必要となり最終的には平成11年2月2日に全作業を終了した。

調査は全期間を通して徳大埋文調査室調査員 橋本、技術補佐員 山本・岸本・原・安山が担当し、9月から12月までは調査員中村、1月15日～2月2日までは調査員北條も担当している。

なお、本調査以前の平成10年8月24日～31日まで、今調査区内にあった既設電気配線および下水管迂回を行うため、調査区外東側と北西側部で数カ所の掘削を行い立会調査を行っている。また本調査終了後、平成11年2月8日～10日までと4月7日～9日までの二度にわたりゲノム機能研究センター建設工事作業上の掘削必要箇所が新たに追加され立会調査を行っている。立会調査は主に橋本が担当し山本・岸本・原・安山がそれぞれ補助している。また一部は北條が担当した。

7 調査区の立地環境と基本層序 (第2図)

徳島大学蔵本団地内には南の眉山から張り出してくる尾根の最先端にあたる東西二つの微高地がある。東微高地は看護婦宿舎から東病棟にまで延び、弥生時代前期には環濠集落が営まれていることが確認されている。また東病棟付近と今回の調査地までの間には大型の流路がいくつか確認されており、南北に浅い谷地形を形成していたと考えられる。一方、今回の調査地は西微高地のもっとも先端部にあたると思われる。これまでの調査成果から今回の調査地より北側は一段低く落ち込み、緩やかに谷状地形になると考えられる。この微高地では弥生時代前期の墓域が存在することも確認されている。

第2図は弥生時代景観の概要である。この図は600年間にもおよぶ弥生時代を一括りにして示しているから、厳密な意味で正確ではないが、おおよその歴史的な自然景観は示しているとできるであろう。

徳島大学蔵本団地内は明治時代から戦前までは陸軍施設が造営されていた。陸軍施設造営以降、現代までの間には幾度かの造成が行われており、発掘調査はまず明治時代以降の造成土を取り除くことから始めることになる。構内ではおおよそ現状の地表より70 cm程度の造成土があり、その下から江戸時代の包含層(黄色粘土)が確認される。さらに下に古代から中世の包含層(暗褐色シルト質粘土)、弥生時代後半から古墳時代の包含層(黄褐色シルト上半)、弥生時代前半の包含層(黄褐色シルト下半～暗褐色シルト質粘土上面)と全体として3～4層に形成された包含層および遺構面が確認されることが一般的である。

8 調査の成果

①第1遺構面（第3図）

明治時代以降の造成土を取り除くと江戸時代遺構面が良好に遺存していた。本調査区は江戸時代を通して水田地帯であったと考えられたが、調査区中央を東西に走る大型水路があり、坪境に沿って小規模な溝と水溜の井戸なども確認された。また全体に二毛作による畑耕作の痕跡が確認できた。大型水路には部分的に石積みによる護岸施設や、杭を打って形成した堰状の構造物も確認された。また、今回出土した水路等は江戸時代の絵図にも示されている計画的に整備された条里型土地区画の一部である。

②第2遺構面上層（第3図）

厚さ10cm程度の江戸時代包含層を掘り下げた黒褐色シルト・黄褐色シルト上面から（場所によって土が異なる）、江戸時代の水路に並行する溝が確認された。これらは回転土師器(10c)が出土した平安時代の溝12、瓦器腕(13c)の出土した鎌倉時代の溝08、そして時期が厳密には決められない溝07などとに区別できる。

庄・蔵本遺跡周辺では条里地割りは正方位ではなく東西方向の場合、北へ10度の傾きをもつことが知られているが、これらの溝も江戸時代の条里地割りと並行するほぼ同じ傾きをもつことから、条里地割りを反映していることは確実で、庄・蔵本遺跡の地域において条里制が施行されたのは10世紀までさかのぼることが明らかとなった。

また、遺存状態が良くないために推定に過ぎないが、江戸時代の大型水路を挟んで両側で確認された平安時代の溝、時期不確定の溝が対となって、その間が道路になる可能性も考えられる。あるいは古代以来の道路の場所にその地割りが踏襲されて、江戸時代の水路が造られた可能性も考えられよう。

③第2遺構面（第4～7図）

第2遺構面では古代前半（飛鳥～奈良時代）、古墳時代、弥生時代中期後半～後期の各時期の遺構・遺物が確認された。

古代（第4図）： 調査区北東部で2棟の掘立柱建物が確認された。2棟ともに総柱建物で、東側建物は4間×2間で5m×4.2mの規模をもち、西側の建物は2間×3間で4×5mの規模をもつ。長軸の方位は異なるが同様の規模である。柱穴は一辺が60cm程度で、柱痕から見て柱の太さは20cm弱くらいのもを用いている。

これらの建物の柱穴からはわずかな遺物しか出土せず、年代を決める根拠は少ないが、TK43～TK209型式の土器が付近から比較的多く見つかり、建物の年代は6世紀後半から7世紀前半を中心としていたと推定できる。また他に建物に重複するが、建物の位置を取り巻くようにL字状に曲がる溝や調査地南側で東西方向に直線的掘られた溝などがある。おおむね6世紀後半から奈良時代の土器などが出土している。

今回の調査地付近ではすぐ南にある青藍会館地点で2棟、大学西側の蔵本公園との間の道路地点（庄遺跡兵営西内線地区）で1棟、そして庄遺跡 加茂名中学校体育館地点で2棟の同様の奈良時代を中心とする掘立柱建物が確認されている。これらの建物は柱穴が方形に近く大型であることが特徴である。この掘立柱建物は飛鳥時代頃から、畿内地域の影

響を受け、地方の官衙（役所）的な建物に主に用いられたと考えられるものである。

また、これらの建物の性格を考えるキーワードに「名東郡衙」がある。徳島大学の体育館地点や兵営西内線地区、加茂名中学校地点などでは、石帯の一部や墨書土器、畿内産土師器などの遺物が確認されている。このことからこの地域が郡衙の推定地になっている。ただし名東郡の設置は896年であるため、これらをさかのぼる庄、庄・蔵本遺跡の奈良時代や飛鳥時代頃の遺構は名東郡以前の名方郡衙と関連する可能性がある。また、さらにさかのぼる6世紀後半頃から、この地域にはのちに郡司となるような豪族が居宅を構え、この地へ郡衙の造営を導いたとも考えられる。律令制下において郡司は地方豪族が世襲的に任命されることから、その可能性はあるであろう。なお、近辺には6世紀後半から7世紀前半の豪族層の墳墓として地蔵院穴不動古墳がある。

古墳時代前中期（第5図）： 主な遺構には溝と井戸がある。そのほかこの時期の可能性のある掘立柱建物2棟以上や柱穴もいくつかあるが、詳細は検討中である。

溝15は調査地区の南西から北東まで弧を描きながら延びており、その南西部と北東部の2ヶ所で土器を用いた祭祀を行ったと考えられる場所が確認された。南西部の祭祀ではほぼ完形の土器が10点ほど並べられた状態で一括出土した。いずれもミニチュア土器と見なされる。4世紀後半～5世紀前半に位置づけられる土師器の広口壺、直口壺、甕などが多く、高杯などもある。また小型の勾玉や管玉も出土している。なかでも注目できるのは畿内産と見られる布留甕（布留Ⅱ式）を徳島で初めて確認したことである。

北東部の祭祀では弥生時代後期の溝の上を切って溝15が延び、その交点に多数の土器が並べられていた。土器は土師器高杯がもっとも多く、形態にも数タイプ見られる。その他、土師器甕、壺、須恵器甕が存在した。須恵器甕はTK208型式に属し5世紀中葉に位置づけられる。

ほかに5世紀前半頃の完形土師器壺・甕をとおさめた井戸3や、5世紀中葉の布留甕（布留Ⅳ式）をとおさめた井戸4などが確認された。

庄・蔵本遺跡ではこれまで5世紀後半（TK208からTK23型式）の遺構がいくつか確認されているが集落構造といった実態はあまり明確になっていない。しかし、この時期の遺物の出土量は豊富で、徳島における代表的な古墳時代集落であるということが出来る。

今回の調査では、これまでに加えてさらに豊富な土器資料を蓄積したのみならず、4世紀後半から5世紀前半という年代的に見て、これまで徳島では空白であった1段階から2段階さかのぼる編年基準資料が蓄積されたことは重要である。調査区近辺に5世紀を中心とする時期の豪族居宅があったことは想定できるであろう。

弥生時代後期（第6図）： 今回の調査でもっとも多く、遺構・遺物を確認したのが、弥生時代後期である。とくに弥生時代後期でも後半から終末期にかけてのものが中心である。

今回の調査区では可能性のあるものを含め11軒ほどの竪穴住居が確認された。深さ15センチ程度の残存状況がほとんどある。形態は隅丸の方形に近いものが多く、浅く掘り窪めた炭の多く集中する炉部があるものが多い。またその内部には柱穴や土抗などがある。住居址内の土抗の一つには縦に半裁された土器とすり石がともなって出土したものなどもある。住居址内からの遺物は少なく、細片の土器などが中心であったが、鉄片や鉄製品と見られるものも出土している。

調査区西端部では大量の炭、ほぼ完形と見られる大型二重口縁壺、大型獣の歯が浅いくぼみ状の遺構の中から出土した。集落内の祭祀場と見られる。

調査区北端では東西方向の大型溝が確認され、この中から大量の土器が出土した。今回の調査で出土した土器の大半がここからの出土品で占められている。この溝より北側が小さな谷地形になると考えられ、集落の北限となる溝であったと考えられる。中から出土した土器は今後詳細な検討を必要とするが、弥生時代後期後半を中心とする時期（黒谷川Ⅰ式を中心とし、その前後の時期）に属するものと考えられる。

またこの溝の中から鉄製品がいくつか出土していることは特筆できる。出土鉄器には袋状鉄斧、鎌、ヤリガンナがあり、その他に鉄片や鉄滓とみられるものなどが存在している。また軽石も存在した。これらは集落部から投げ込まれたものと考えられ、鉄製品の所有とともに鍛冶の行われた可能性も示すものである。住居址内の土の分析作業がいまだ行えていないため詳細は言及できないが、いくつかの住居址の炉が鍛冶にともなうものである可能性は十分考えられる。

また、集落域はこれまでの調査成果から緩やかな谷地形となる東側には展開しないことが明らかとなっている。一方、西側では大学西外側の市教委調査の庄遺跡兵営西内線区で同時期の遺構・遺物が出土していることから今調査区から西へ向かって大学運動場地区を中心に展開しているものと思われる。

同時期の県下における代表的な集落には徳島市名東遺跡、矢野遺跡、板野町黒谷川郡頭遺跡などがある。これまでに庄・蔵本遺跡では旧河道などから当該期の遺物は出土していたが集落自体が明らかになっていなかった。一方、今回の調査では新たに庄・蔵本遺跡にも弥生後期の大規模集落の存在が明らかになったことは大きな成果である。

弥生時代中期末～後期（第7図）： 弥生時代後期の集落と切り合う状態で、弥生時代中期末から後期にかけて、方形周溝墓が造営されていたことも確認された。調査区の南側を中心に、方形に配置された途中で途切れる区画溝がいくつか見られた。その溝の組合せから方形周溝墓が3基存在したことが判明した。後期の集落の遺構は黒褐色埋土であるが、周溝墓の溝内埋土は色が浅く、うす茶色に近いものであり、明らかに区別できた。

遺物は多くはないものの完形に近い土器がいくつかおさめられていた。土器は弥生時代中期末～後期初頭のものと考えられる。全体に攪乱やのちの時代の遺構の切り合いが激しく相当部分が削平され、埋葬施設も残っていなかった。

県内において方形周溝墓はほかに名東遺跡で23基確認されているものの、それ以外では庄・蔵本遺跡95年の病棟地点で4期確認されたのみである。今調査地でもまた方形周溝墓を確認したことは庄・蔵本遺跡にも方形周溝墓群が形成されていたこととともに、徳島における弥生中期末から後期のある段階までの墓制が方形周溝墓という形態をとっていたことを明確にした点で重要である。

また、調査区北西部では同時期と見られる土抗5基を確認している。人頭大の結晶片岩をもつものがあり、土抗墓の可能性もある。

④第3遺構面（第8図）

弥生時代中期前半： 第2遺構面より20～30cm掘り下げた黄褐色シルト下半部の面において、調査区中央部を南北に走る断面台形の大型溝が確認された。幅2.5～3m、深

さ1 mを測る。若干のブレはあるがきわめて直線的で、流水の形跡はあるものの何らかの区画溝のようである。内部には完形土器5点を中心に土器の集中部なども存在した。出土土器はいずれも、弥生第Ⅱ様式併行期に位置づけられる。

これまで体育館地点や医療技術短大（第7次）地点でわずかながら第Ⅱ様式土器は出土しているが、今回の出土資料がもっとも良好な一括資料であると見なされる。また徳島県内では他に第Ⅱ様式土器出土遺跡はなく重要である。庄・蔵本遺跡が若干の盛衰や地点の変更をとめないながらも、弥生時代前期から中期前半まで存続していたことが判明した。

その他、年代は特定できないが同じ層位で小規模な集石や土抗などを確認している。

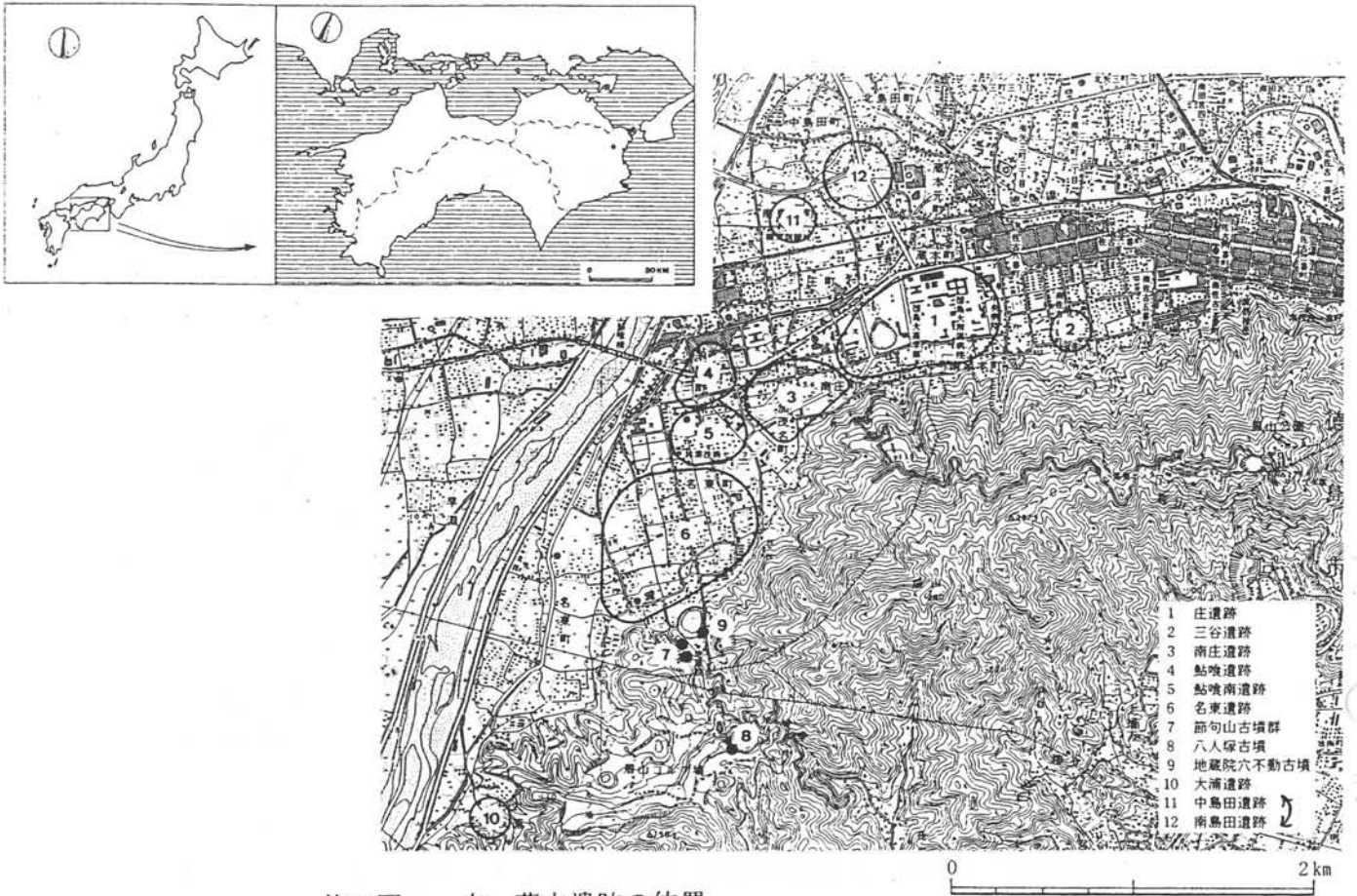
弥生前期： 弥生後期の土器が大量に投棄されていた調査区北端部の東西溝は、弥生後期以前にはさらに大規模な河道であり、その上限は弥生前期までさかのぼることが確認された。すなわち弥生後期の遺物は弥生前期以来のこの大河道の埋没過程で投棄されたものである。そして古墳時代には埋没している。

今調査区内にはこの河道の一部しか入っていないため正確な規模は不明であるが、確認幅は2.6m、推定復元幅は5 m以上と考えられ、深さは2.3 mを測る。調査区北東隅付近には医療技術短大増築（第9次）調査地点で確認された南北の溝につながる溝が分岐しており、分岐部付近の河床には河道の水を堰き止めるように南北、東西に3群の杭列を打ち込み堰を構築していた。また堰の南河岸はスロープ状になっている。このスロープを下った堰横には頸部から上を欠いた壺形土器が1点おかれていた。土器内部にはベンガラと思われる赤色顔料が付着しており、底部には藁状のものをとぐる巻にしたクッションのようなものが入っていた。

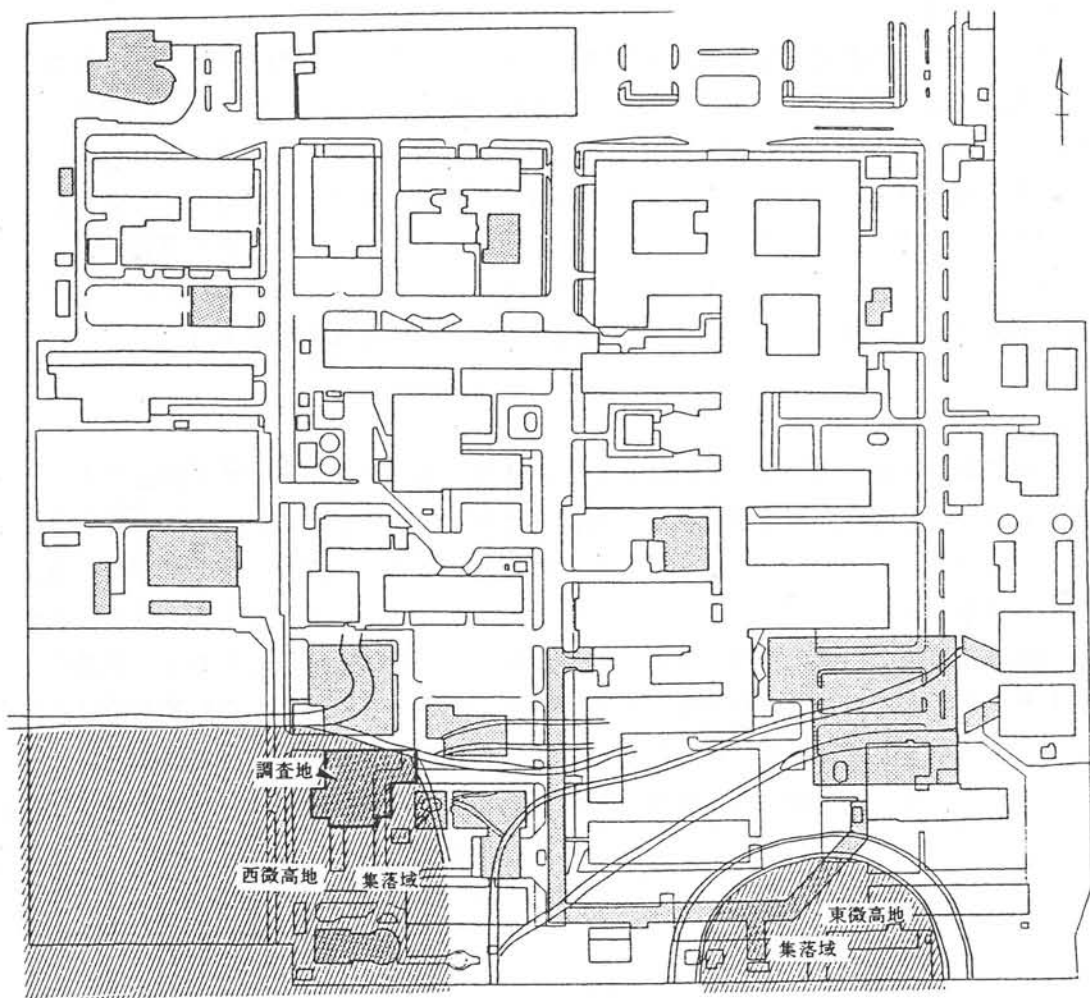
この東西河道は動物実験施設で確認された河道につながるものと思われる。動物実験施設においては、しがらみの上部構造まで残る堰があったされる。さらにこの河道の延長はそのまま西へ進み、大学西側蔵本公園との間の市教委調査地点、庄遺跡兵営西内線区につながるものと見られる。これらいずれの地点でも豊富な遺物をとめないまた弥生前期から後期を経て古墳時代に至る長期にわたる遺物が出土している。庄・蔵本遺跡一帯における水資源に関わるきわめて重要な集落の構成要素を担っていたことは疑いない。徳島における水資源の人口管理を示すもっと古い遺構とすることができるであろう。

9 まとめ

今回の調査の最大の特徴は各時代にわたる非常に多くの遺構・遺物を確認できたことである。庄・蔵本遺跡は弥生時代前期の遺構・遺物がよく知られているが、さらに弥生時代中期や後期の存在を明確にし、その後の古墳時代、飛鳥・奈良時代まで小期間の断続を挟みつつ連綿と人間活動が営まれ続けていたことが判明した。なかでも、大量の土器や初現期の鉄器も出土した弥生後期の資料は庄・蔵本遺跡の性格を考える上でも、徳島の弥生時代を考察する上でも重要資料となることは間違いない。この一帯が自然地形的に人間生活の上できわめて良好な場所であったと見ることができる。その後、条里制施行によって生活域から生産域へと土地利用の変化を迎えるが、古代以来、長期にわたり地割りを踏襲し明治を迎えるというのも安定的な立地によるものと思われる。この地に陸軍の兵舎が営まれ、現在大学に引き継がれているのも良地選択における歴史上の必然のようにも思われる。

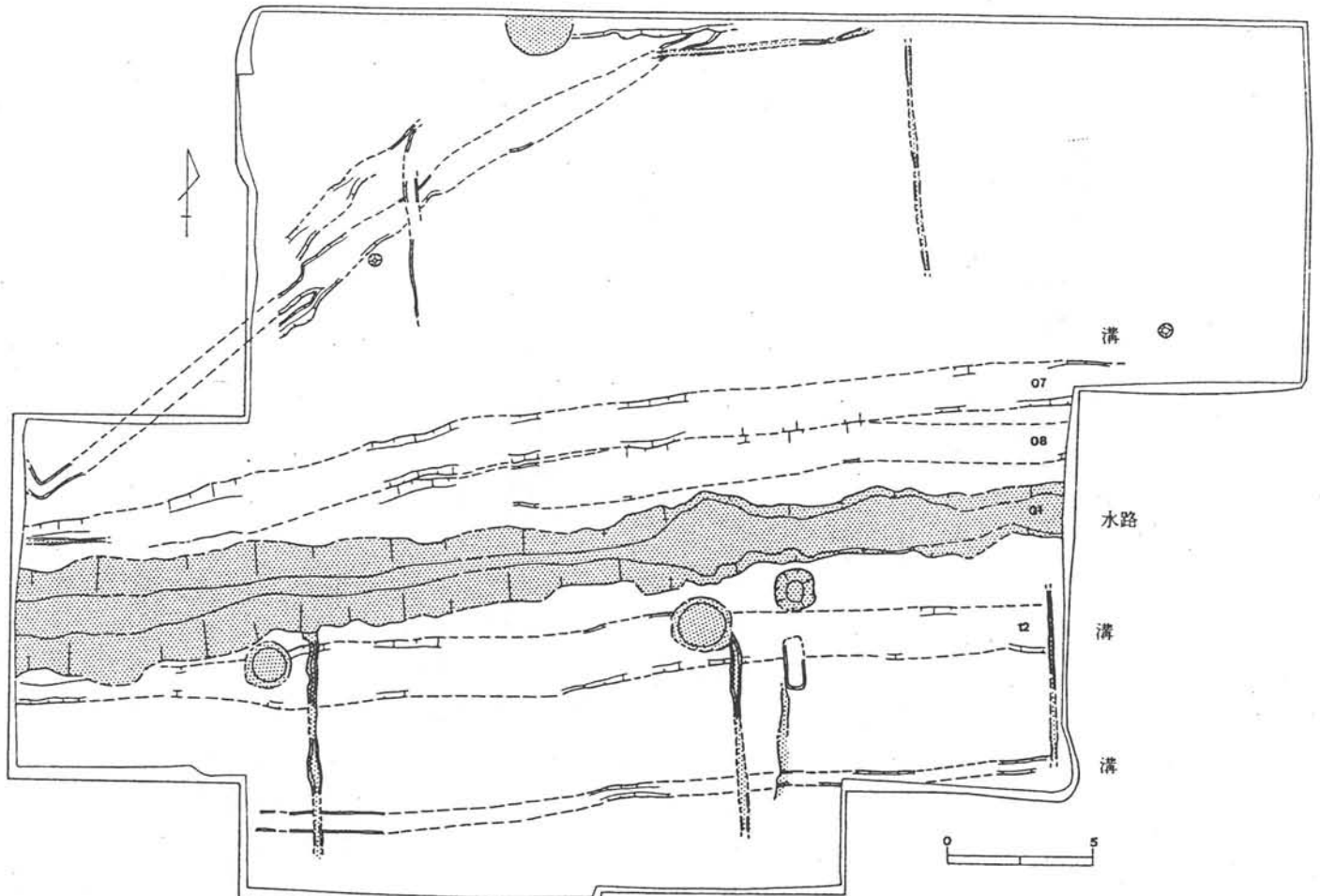


第1図 庄・蔵本遺跡の位置

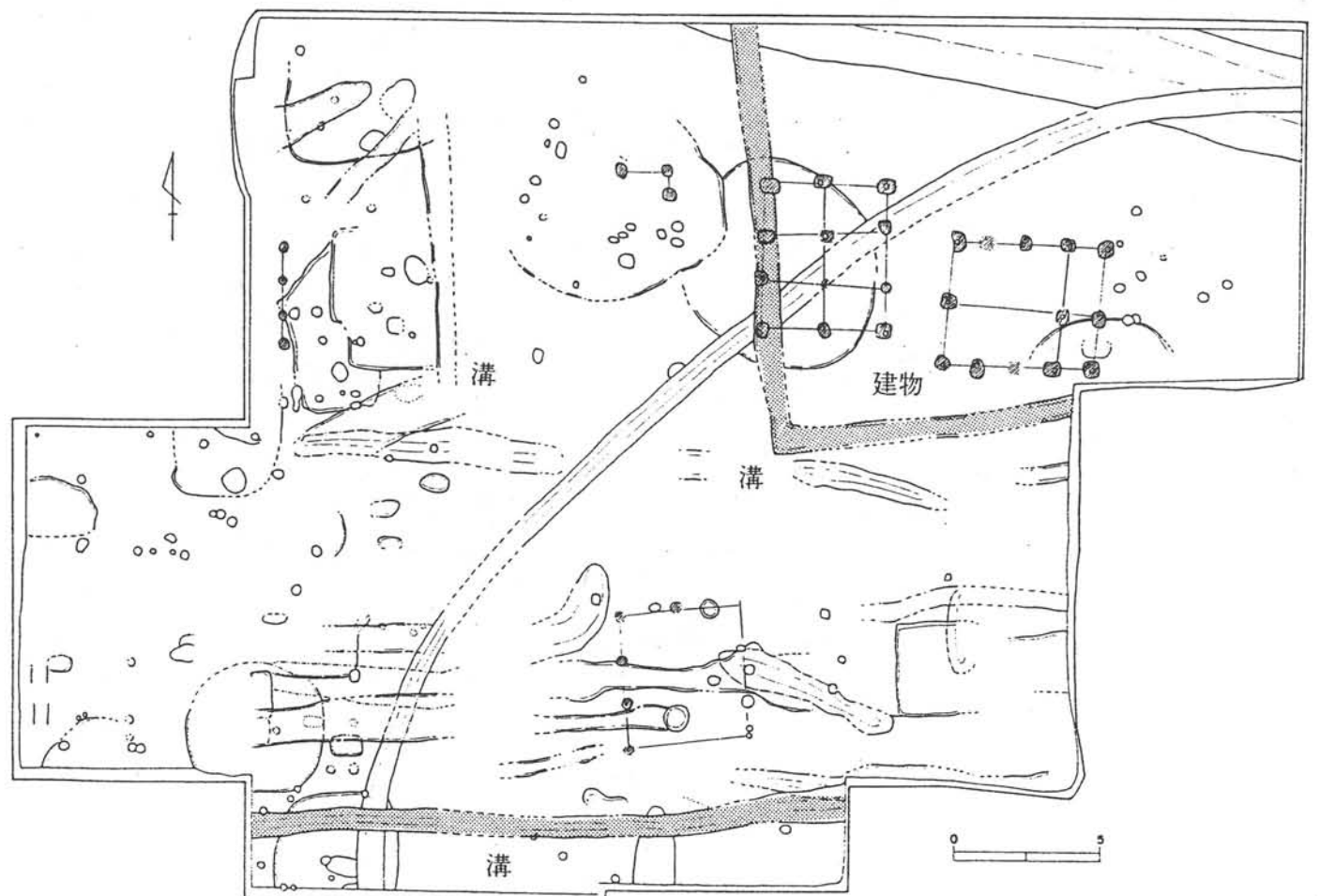


第2図 今回の調査区と弥生時代地形

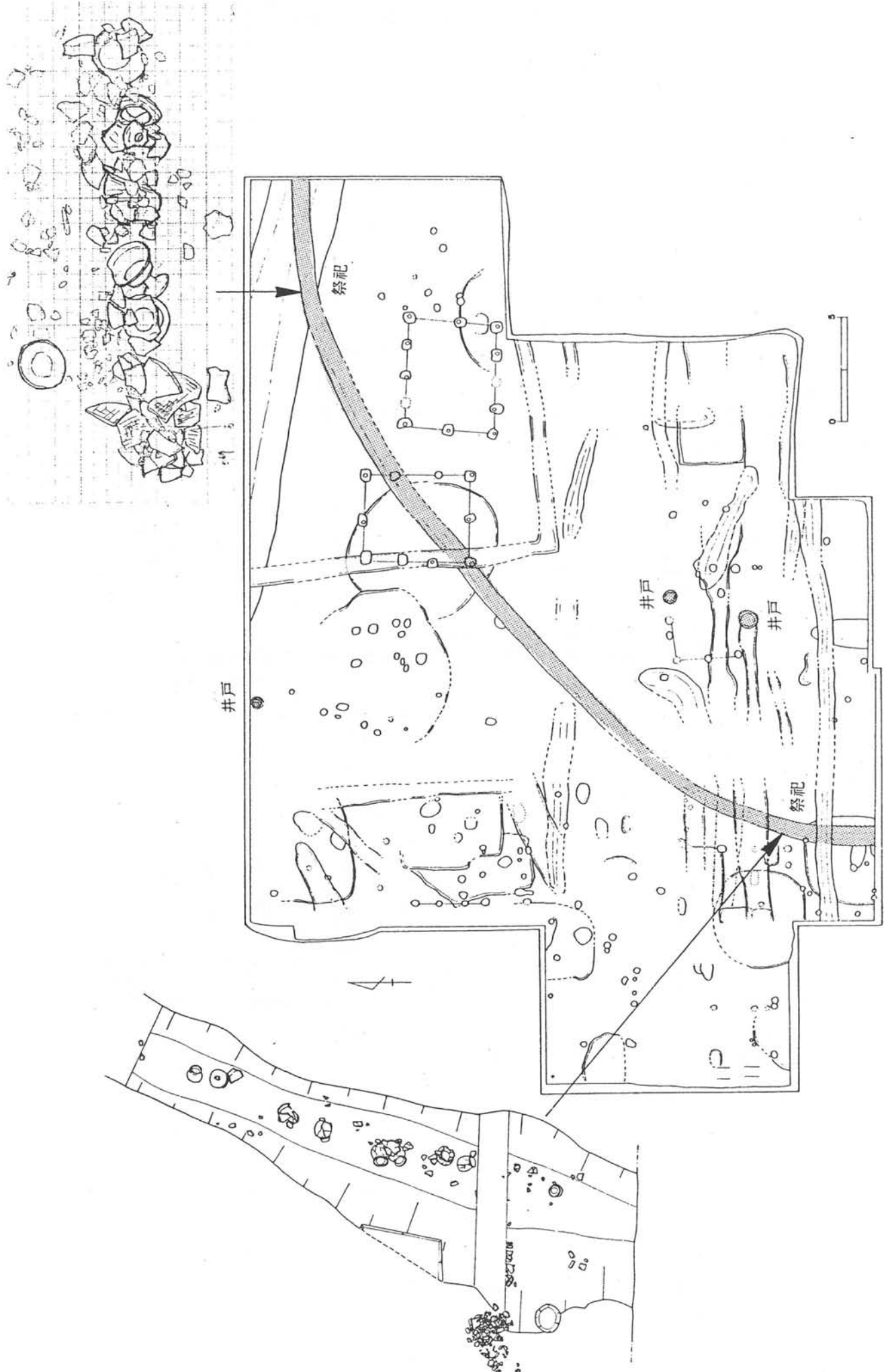
7かけ部は既調査区



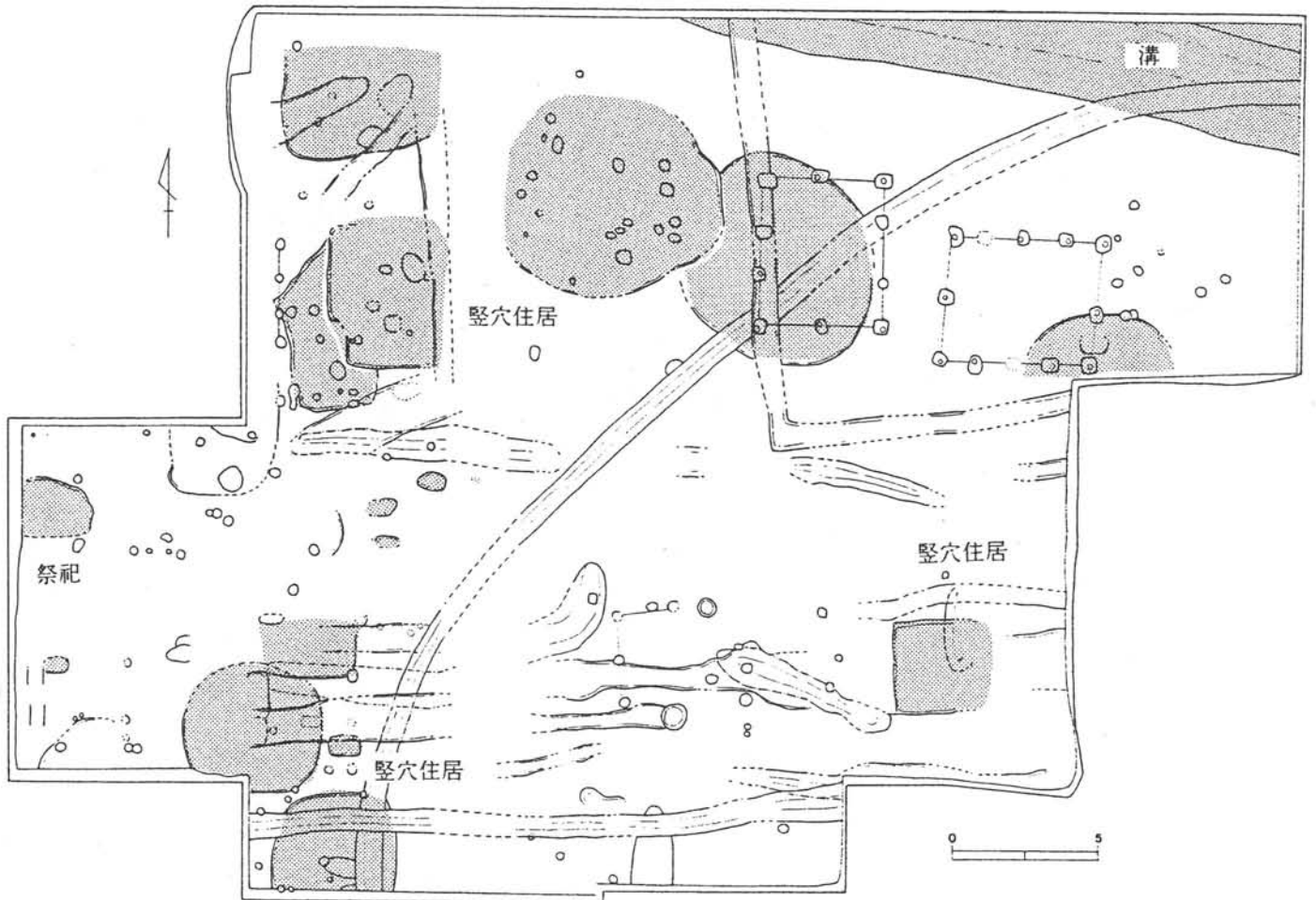
第3図 近世（第1遺構面）・古代～中世（第2遺構面上層）の主な遺構
7:掛け部は江戸時代遺構



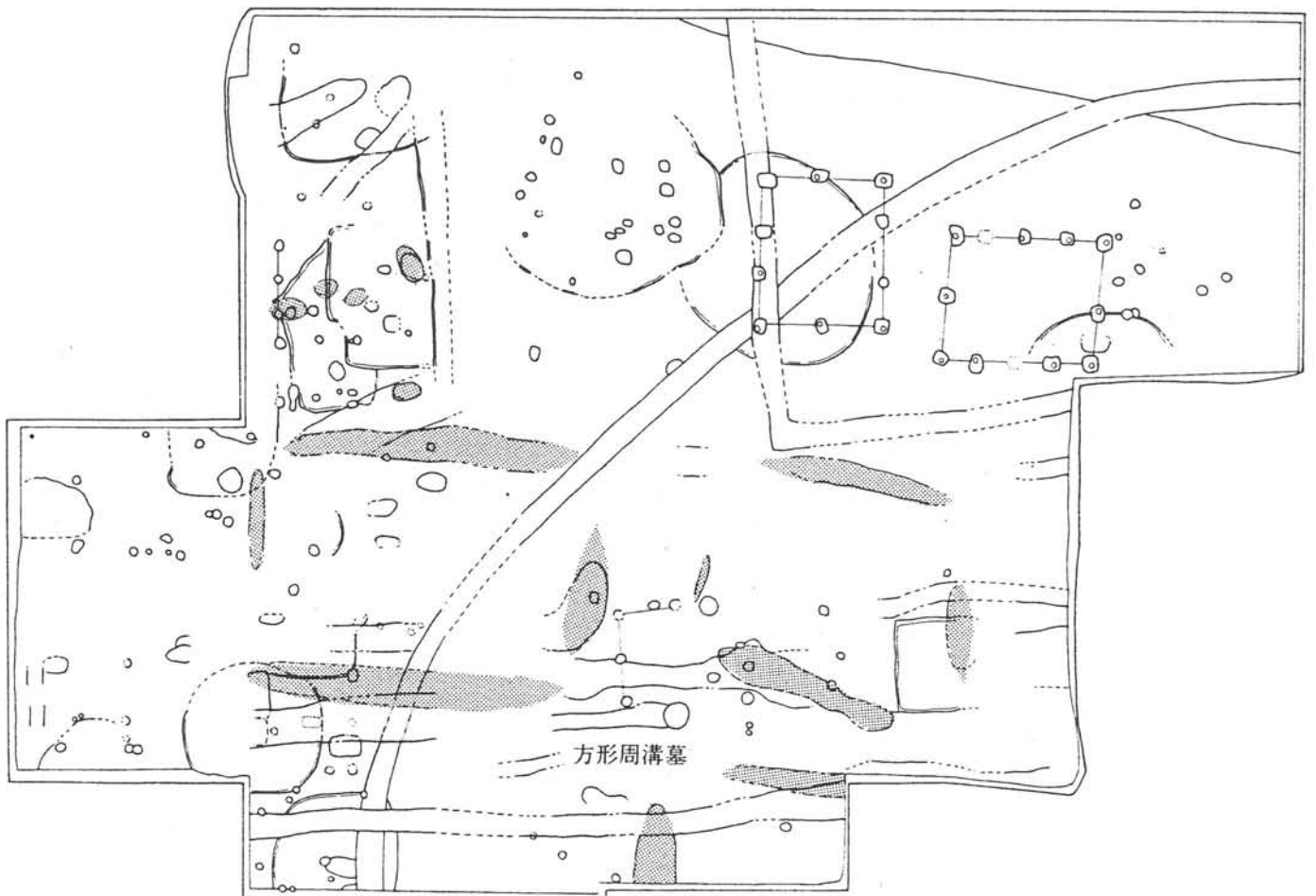
第4図 6世紀後半～8世紀の主な遺構 (7:掛け部)



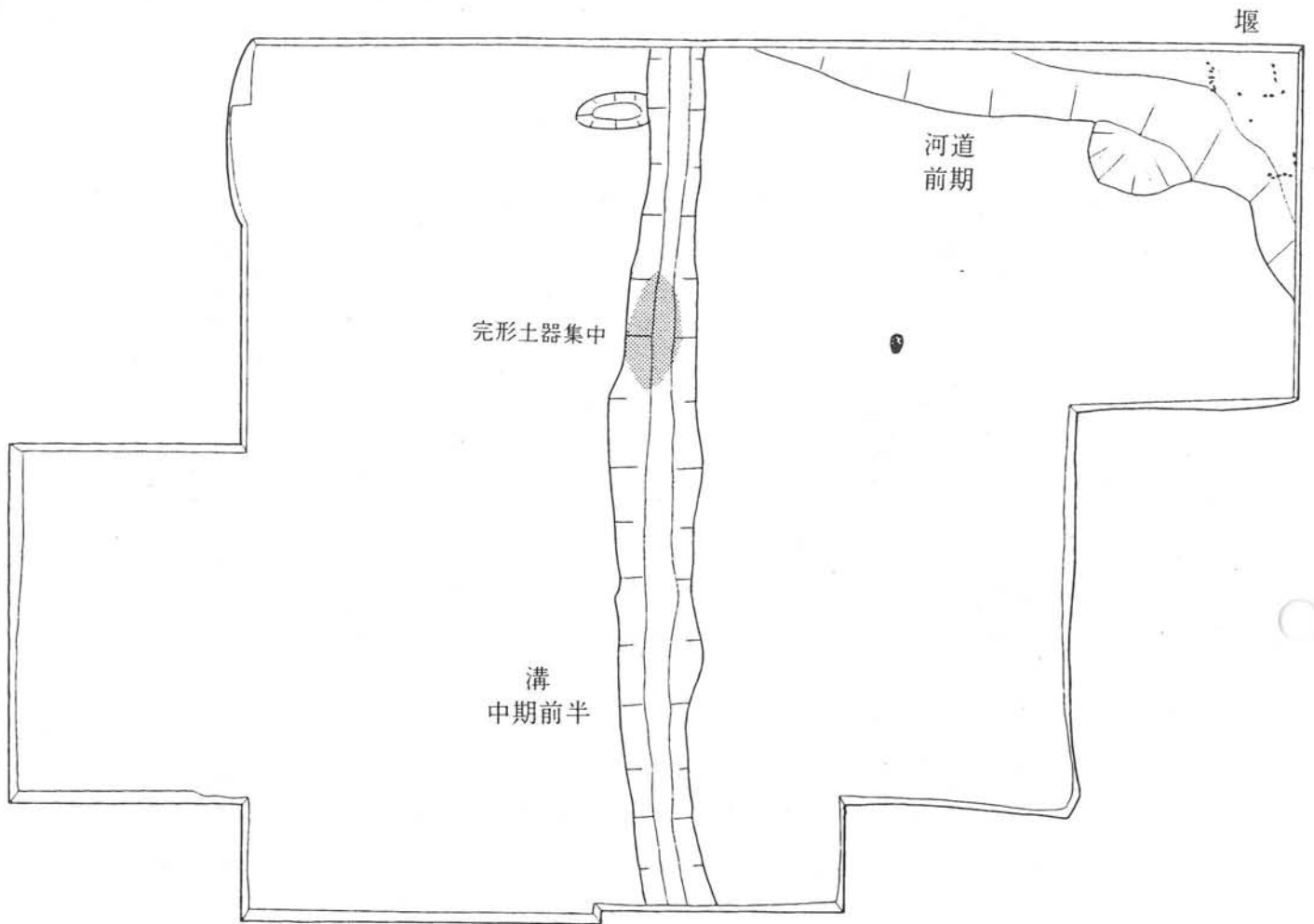
第5区 古墳時代前中期の主な遺構 (7掛け部)



第6図 弥生時代後期後半の主な遺構 (7世紀)



第7図 弥生時代中期末～後期前半の主な遺構



第8図 弥生時代前期～中期前半の主な遺構



近世水路・耕作痕跡等
(第1遺構面)



古代～中世溝など
(第2遺構面上層)



7～8世紀の掘立柱建物
(第2遺構面)



古墳時代の溝内
土器出土状況
(第2遺構面)



古墳時代の溝・
ミニチュア土器出土状況
(第2遺構面)



弥生時代後期後半の溝
・土器出土状況
(第2遺構面)



↑
鉄斧

弥生時代後期後半の溝内
土器・鉄斧出土状況細部
(第2遺構面)



弥生時代後期後半の集落
(第2遺構面)



弥生時代後期後半の
竪穴住居



弥生時代中期末～
後期前半の方形周溝墓
(第2遺構面)



弥生時代中期前半の溝
(第3遺構面)



弥生時代前期の河道と堰
(第3遺構面)